巨道空二
表紙イラスト：秋月からす

宇宙海賊 ユリカ&キョーコ

試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『宇宙海賊ユリカ＆キョーコ』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

宇宙海賊ユリカ&キョーコ

巨道空二
表紙／秋月からす

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ユリカ

二人組の宇宙海賊の一人。機動力と攻撃力を重視した宇宙船『サイレン』を操る。ショートカットの金髪で、スポーティな美女。

キョーコ

二人組の宇宙海賊の一人。ステルス機能に優れた宇宙船『ローレライ』に乗る。ロングの黒髪と眼鏡が特徴の、豊満な身体の美女。

ドルク

麻薬組織の幹部で、孤児院の子供たちを人質にする。赤い手のドルクと呼ばれている。

星が瞬いていた。手を伸ばせばこの掌に掴めてしまいそうにクリアな星空だ。ブリッジの窓からの景色は見飽きるということがない。男はここから星を見るのが好きだった。

「あれ……疲れているのかな」

当直の航宙士が異常に気がついたのは、レーダーからではなかった。光学的な監視……つまり目視によるものだ。気がついたのは幸運だったが、彼はそれを生かすことができなかった。かすかな星の揺らぎは目の疲れによるものだと思ってしまったのだ。

船団は商船三隻に対して警備会社の護衛一隻の小規模な船団だ。小規模な戦闘が繰り返される辺境ではこれでも心もとない。当直士官は再びレーダーに目を落とすが、そちらにはまったく問題はないようだ。もちろん本物の軍艦ほどの出力ではないが、軍艦が到着するまでの時間を稼ぐ警備船としてはそれで十分なはずだった。

はっと男の目が見開かれた。突然、後方に大きな反応がレーダーに出現したのだ。警報ボタンを押す前に自動のサイレンが響きわたる。合成音声が高らかに船の現在位置と危機の内容をアナウンスした。

「船団後方に国籍不明船発見。航路オリオン腕西一七三ノ五二、現ベクトルは……」

アナウンスに遅れることなく、航宙士は船長を初めとする乗組員に非常呼び出しをかける。先ほどの星の揺らぎがカモフラージュだったことに今更気づいたのだが、もはや手遅れだろう。

サイレンはそのまま警告から緊急に切り替わった。国籍不明船に自動で照会をかけた結果、敵性船と分類されたということだ。商船隊に異常接近する敵性船……すなわち、海賊。

「海賊だと？　しかも……この信号は『サイレン』だとっ⁉」

きっちりと警備会社の制服を身に着けた船長が席につき、慌ただしく指示をくだす。

「はい。サイレンに間違いないと思われます。……どうします？」

「どうもこうもない。戦闘準備だ。我々にはそれしかない」

そう。彼らは海賊対策として雇われた護衛船だ。勝ち目がなくとも戦うしかない。

「信号届きました。主機関を停止して待機せよ、また商船はそのまま進めとのことです」

「軍に通報。第一戦闘態勢。主機関全開、主砲チャージ開始」

商船も海賊船に気づいたようだ。あわてて加速するコンテナ船の後方を確保したまま、警備船は戦闘用アンテナを展開して戦闘態勢を整える。

「沿岸警備隊か軍が到着するまで持ちこたえるぞ。敵はサイレン、侮るなっ！」

警備スタッフの間に緊張が走る。サイレンは今まで獲物を逃がしたことがないと言われており、異常なほどのスピードと攻撃力を兼ね備えた有名な海賊船だ。侮ることなど不可能だった。

「ふふっ。やるみたいよ、あちらは。どうする、キョーコ？」

「決まっているでしょ。ユリカの出番じゃない」
戦闘態勢の警備船を前にしているとは思えないほどにのんびりした会話だった。ショートカットの金髪がよく似合うのがユリカ。ロングの黒髪をアップにしてまとめているのがキョーコだ。
「くすくすっ。そうね。それじゃあ、行ってくるわ」
「よろしく、ユリカ！」
二人はヘルメットをかぶる。ブリッジには他の人影はなく、乗員のための座席もほとんどない。たった二人のためのブリッジだった。ユリカが部屋を出てすぐに、コンソールのランプが点滅し、船長席に残ったキョーコの手元にユリカの画像が現れる。もう準備ができたのだ。
「サイレン、分離！　やるわよぉっ！」
「サイレン分離、確認。十秒後に遮蔽から抜けます」
すでに興奮した声がユリカの唇からこぼれる。しっかりと宇宙服を身に着けた上からもしなやかな身体のラインがわかるほどのプロポーションだ。
ぴっちりと肌にはりつくような生地の下には野生の獣を思わせるスポーティなボディが息づいているのだ。細身ながらもしっかりとした筋肉と脂肪がバランスよくついた身体は魅惑的な脚を形作っていて、男ならふるいつきたくなるほどだ。

どこを触ってもピチピチに張り詰めた若さと美しさに満ち満ちている。それがユリカの魅力だった。少々無鉄砲なところもご愛嬌といったところだ。少々胸が小さいと文句をつける男をいるかもしれないが、まだまだ発展途上の年齢だ。数年後には男の目をひきつけて離さない美女になることだろう。

「今のうちなら許してあげるんだけど……やる気みたいね。遠慮はしないわよっ」

好戦的なセリフが似合っている。ユリカは強気な少女だった。

すっきりした首筋からショートの金髪と白い肌のコントラストは目を奪うほどで、青い瞳は戦いの予感にキラキラと輝いている。勝気な印象の目は吊り目ぎみで、長い睫毛が優雅だ。どこか高貴な女性といった感じすらある。

だが、そんな美貌の一方でユリカは実に有能な宇宙船乗組員なのだった。

一方、ユリカの小型宇宙船『サイレン』を分離したキョーコの宇宙船『ローレライ』も反転するように進路を変え、警備船に向かっていく。サイレンとローレライはまったく同じ識別信号を持つ小型船であり、この宙域では有名な海賊船なのだった。機動力と攻撃力を重視したサイレンとステルス能力に優れたローレライの二隻のコンビネーションは驚異的な戦闘力を発揮し、海賊掃討艦隊を振りきって活躍を続けている。

「ふふっ。頼んだわよ、ユリカ」

海賊船ローレライの操縦桿を握りながらキョーコが笑う。こちらは黒髪に白い肌の肉感

的な美女だ。ほっそりとしなやかなユリカとは対照的に柔らかくふっくらとした印象の妖艶な女性で、年長者の落ち着きを備えていた。落ち着いたデザインのメガネが知的で大人っぽい雰囲気だ。

長い黒髪にメガネと、まるで研究者か女医といったイメージのキョーコは有能な技術者であり、宇宙船乗組員だ。どこまでも知的な瞳が楽しそうに輝く。

ぴっちりと身体にはりついた宇宙服がその整った豊かな肢体を鮮やかに浮き上がらせている。ぷっくりと丸く盛り上がる胸は男の手に余るほどに大きく、しっかりとくびれた腰からお尻にかけてのラインは芸術的なほどに美しい。むっちりとした太腿も色っぽく、こんなにぴったりした宇宙服を身に着けるのは犯罪的なほどの色っぽさだ。

「私もグズグズしてらんないわね。行きましょっ」

護衛船はさすがに訓練された動きで船団の最後尾へ移動する。ミサイル、ビーム兵器のスタンバイがされ、外部からもエネルギー反応が急速に高まっているのがわかる。

「へぇー、さすがに場馴れしているわね。少しは歯ごたえあるかしら」

ユリカはサイレンの狭いコクピットでにこやかに笑う。スポーツで歯ごたえのある対戦相手を見つけた、といった感じの笑みは爽やかですらある。そんな彼女の宇宙船サイレンはすでにローレライのステルス効果を抜けてその優美な姿を明らかにしていた。

ほっそりした、フルカバータイプのボディ。空気抵抗のない宇宙船ではとんでもない形

状をした船も珍しくはないが、まるで大気中を飛ぶ航空機のような美しいシルエットだった。見た目だけでこの船の戦闘力を見抜ける者は、そういないだろう。

サイレン。元軍の技術士官だったキョーコがユリカと自分だけのために作り上げた戦闘用宇宙船だ。通常の戦闘用宇宙船に必要とされるキャビンなどを排除し、たった一人で扱えるように設計された、言ってみれば巨大戦闘機だ。船室などを装備せざるを得ない軍艦に比べて圧倒的に小さな船体にもかかわらず、機能を絞ったことで強力な戦闘力を備えている。

「さーて、まずは第一撃。避けられるかしらっ」

ヴュムッ！

闇を貫いて迸る光条が虚空に吸い込まれていく。回避したのだ。鈍重な警備船だったがユリカの攻撃を予測機動により避けたのだった。

「やるじゃないっ。でも、今の一撃を受けていたほうがよかったかもよ」

量産された警備船の構造は把握している。戦闘力を奪うための出力系統だけを破壊するつもりだったが、どうやらそうもいかないようだ。殺生は減らしたいのだが、やむを得ないだろう。相手が有能であるなら、本気で戦うしかない。

「キョーコ、ごめん。最悪沈めちゃうかも」

「了解。あなたにまかせるわ」

沈める……。宇宙空間で沈めるも何もないものだが、はるかな昔から、船が破壊されることは沈む、と言われている。海賊行為はただでさえ重罪だが、船を沈めると罪はさらに重くなるのは当然だった。

警備船からもようやく反撃のビームがやってくるが、予測射撃の予想を大きくこえてサイレンは加速する。はるか後方をビームが通過していくのを、ユリカはすでに気にもしていない。彼女の動きを追尾できる対宇宙戦闘機用の迎撃ミサイルこそ恐ろしいものの、民間の警備船ごときがそんな高価な装備をバラ撒くとは思っていない。

「船体中央部……このへんね」

拡大表示される目標船。すでにお互いに視認できるほどの距離になっている。光速の数パーセントにも達する速度での戦いでは本来なら戦闘のチャンスそのものが多くはないはずだが、慣性制御装置の搭載が宇宙戦闘を古代の海戦のごとき戦いに引き戻していた。

必死になって回避運動を繰り返す警備船だが、悲しいかな、回避行動を繰り返すほどに予測射撃回路はデータを蓄積していく。

「下手に避けないでよっ……ファイアッ！」

もう一度、サイレンの主砲が虚空に無言の雄叫びをあげると、まるで大型艦のごとき出力のビームが研ぎ澄まされた槍のごとくに警備船を貫いた。

いやらしい笑いを浮かべたドルクが男たちに指図する。子供たちに恥ずかしい部分が丸見えのポーズのまま、男たちが二人の美女の横に並んでいく。

「それじゃあキョーコ、ここは何だ？」

男の一人がレイガンの銃口を押し当てたのは、よりによって膣口だ。顔を真っ赤にしたままのキョーコが苦しげな表情を見せた。

「そ、そこは、その……ああっ……膣、です」

「そんな難しい言葉じゃなくて、わかりやすい言葉があるだろう？」

女海賊といっても女は女だ。羞恥心もあればプライドもある。ましてや子供たちの前で、麻薬組織の男たちの前で口に出すのはあまりの屈辱といえた。

「しかたねえな。素直になれるおクスリを使ってやれ」

「いっ、いやよっ。それは許して……っ！」

「駄目だな。キョーコ、お前は油断がならねえ。今だって、船を呼ぼうとしていたんじゃないか？　無理なことさ。船も押さえてあるからな」

ハッとしたユリカが相棒の表情を窺うと、いつでも冷静なはずのキョーコの顔に脂汗が浮かんでいた。ユリカ自身も背中が冷えるような違和感を感じていた。二人が身体に埋め込んである同調装置に変調が生じているのだった。

「たった二人で扱える海賊船か。さぞかし自動化がされているんだろう。だが、貴様らと

ちょっちシン
試し読み
ここから
スタート！

の接続を完全に断ってしまえば、呼び寄せることもできないだろう」
「くっ……よくも、私たちの船をっ」
スタンプ式の注射器が近づいてくるのを憎々しげににらみながら、キョーコが吐き捨てるように言う。サイレンとローレライは彼女たちの頭脳と接続されることによって性能を発揮する。できるだけ少人数で運用できることを念頭において設計された二隻はキョーコが持ち出した軍仕様の機器を埋め込むことでその驚異的な性能を得ていたのだった。
「キョーコ、あたし……サイレンと交信できてない……っ。これって……っ」
いよいよの時がきたら、二隻の船はどこにいても二人を救出にやってくる。今回は子供たちに巻き添えが及ぶのを恐れて起動していなかったが、それが二人の奥の手だった。最後の手段を封じられた衝撃はキョーコにとっても大きかったようだ。
「ごめんなさい、ユリカ。……私が甘かったみたい」
声がかすかに震えていた。注入されるクスリが何なのかは知らされていなかったが、どうせろくでもないクスリなのだろう。キョーコの恐怖が伝わってくるような気がした。
「ううん。キョーコがいなかったら、あたしは今頃生きていないもの」
奴隷商人から逃げ出したユリカが軍の事務所前にいたのを保護し、入隊を薦めてくれたのが彼女だった。そして、訓練の時も、作戦中も非番の時にはずっと目をかけ、サポートしてくれた。軍をやめ、孤児院を作る計画を打ち明けられた時は嬉しかった。

あれから何年もたったわけではないけれど、何人もの不幸な子供たちを救うことができたと思っていた。人身売買のネットワークから拾い上げ、教育と愛情を注いできたつもりだった。

それが、キョーコと自分の夢がこんな形で終わりを告げてしまうのかと思うとあまりに悔しく、悲しかった。

「さあ、もう一度聞いてみようか。ここはわかりやすい言葉で何と言うんだ？」

「オ……オマ〇コ……です」

理知的なメガネ美女の唇から恥ずかしい言葉が漏れると男たちは手を売って笑った。

「それじゃあ、ここは？」

膣口を飾る花弁をつつかれたキョーコが悲しげな声をあげる。

「ラ、ラビアです……ああっ……もう許してっ――」

クスリの効果だろうか。キョーコとは思えない言葉の連続だった。子供たちは呆然としてその魔的な光景に見入っている。

「これは濡れているのか？」

「ああっ……そっ、それは……」

苦しげな口調。抵抗しているのだろう。だが、それも秘処をつつかれると崩れてしまう。

「ごっ、ごめんなさい……濡れています……」

その言葉どおり、じっとりと濡れているのが、すでに離れた場所からもわかるほどになっていた。花弁がしっとりと水分を含み、透明な滴が今しも会陰に伝い落ちていこうとしているほどだ。

「何で濡れているんだ？」

「やっ、やめてっ。これ以上……あっ、ああっ……感じてしまっているから……っ」

こんな声は聞きたくなかった。いつでも自信たっぷりで冷静で頼りになるキョーコがこんな言葉を発してはいけないのだ。子供たちの母親がわりで、時には教師にもなる女性。子供たちにとっては理想の女性がこんなに淫らであってはいけないのだ。

「やめてっ。それ以上キョーコにひどいことしないでっ」

ユリカの身体とて、解放されているわけではない。それどころか、男たちの手にはい回られているのは変わらない。ドルクの注意がキョーコに集中しているために言葉責めを免れていたにすぎない。そのドルクがニタリと笑うと背筋に悪寒が走ったが、引くわけにはいかなかった。

「キョーコはあんたたちが手を出していい人じゃないの。あたしにしなさいよっ」

それはユリカの本心だった。キョーコは彼女にとっても理想の女性だった。彼女がこれ以上汚されるのは耐えられなかった。

「あたしだったら、何をされてもいいからっ。キョーコはやめてっ。お願いだから……っ」

一気にそれだけ叫んだユリカは全身真っ赤になっていた。それが何を意味するか、今更ながらわかってしまったのだ。今以上に恥ずかしい目にあわされる。今以上に屈辱的なことをされてしまう。だが、それでもキョーコがされるよりはマシだった。

「ほほう。見上げた心がけだなあ、小娘。だが、おれたちがうんと言うと思うのか？」

「そっ、それは……」

キョーコほど綺麗じゃない。胸もお尻も大きくない。彼女ほどに優しくもなければ頭がいいわけでもない。でも、男たちに黒髪の相棒を差し出すよりは、ユリカ自身を生け贄にするほうがはるかにマシなのだ。

「ヤクを返してくれればいいんだぜ？」

「そ、それはできないわよっ。もうないものっ……でも……キョーコはだめなのっ」

「いいのよ。ユリカ……私は覚悟できているから……」

キョーコの目には涙が浮かんでいる。それを見てしまうとなおさら彼女を男たちのいいようにはさせておけなかった。この黒髪の美女がいなかったら、ユリカは今頃生きてはいなかったろう。はるか彼方の惑星に売られていたか、軍の中で使い捨てられていたことだろう。恩人を、尊敬する女性を守りたいのだ。

「あたしが何でもするから……っ。キョーコと子供たちにはひどいこしないで……」

「こいつは驚いたな。生意気な小娘のセリフとは思えない」

男たちも野卑な笑いのすみに驚きを浮かべている。だが、その驚きはすぐに淫らな欲望にとって変わるのだった。

「よかろう。小娘が我々に絶対服従している間、キョーコには手を出さない。それでいいな？　貴様が逆らった時はガキもキョーコもひどい目にあう」

「わっ、わかったから……もう、キョーコには……」

しおらしくなった金髪少女に男たちはご満悦だった。子供たちの前で恭順を示した小生意気な小娘は、もはや欲望の矛先となるしかない。

「さて小娘。ここは一体何だ？」

「お、お尻の穴……」

男たちの間から失笑が漏れる。羞恥に消え入りたい風情で少女は目を閉じ、顔を背けたままだ。だが、少女の身体はこの異常事態の中、明らかな変調をきたしていた。

「ほほう。ケツの穴か。それで、ケツの穴も濡れるものなのか？」

「う……うそっ。そんなとこ、濡れないっ。濡れるわけないっ！」

だが、ユリカの身体には深刻な変化が起こっていた。彼女自身が認めたくない事実。

にちゃっ――。

「ひゃあっ」

思わずビクン、と身体が震えてしまった。かすかな水音らしきものが聞こえた気がした。

なくなっていた。

「くくくっ。いいぞ、小娘。引導を渡してやろう。このおれがな」

ドルクがニタニタと笑っていた。異様に口の端がつり上がる笑いだった。右手の手袋を脱ぐと、異様なモノが現れる。それは「赤い手」と呼ばれるドルクのふたつ名の元となったモノ。

「はあっ、はあっ、はあっ――」

膣内を抉られながら視界の端に赤いモノが見えていた。それが何かはわからなかったけれど、不吉な存在であることだけはわかった。

「大丈夫。痛くはないさ。いいクスリを使うからな」

それは、ドルクの作りものの腕から伸びる赤い糸。極細のマイクロマニピュレータだ。幾本ものマイクロマニピュレータはもともと医療用のものだったが、ドルクはこれを女を責めることに応用していた。クスリを女性の胎内に効率的に送り込むためのシステムだった。

「ああっ……やだあっ。せめて、せめて男の人のモノでぇっ」

麻酔薬入りのローションで糸を引いた触手は、ざわざわとうごめきながら少女の胎内へ侵入していく。柔肉を貫くペニスにそって膣の奥に入っていくそれは男根に絡みつくようにしながら女体に異様な感覚を伝えてくる。

ちょっちシーン試し読み
ここからスタート!

「なっ、何これぇっ……っ。ああっ、おかしいっ、おかしくなっちゃうのォっ」
ビクビクビクッ！　胎内で触手が震えた。無数に埋め込まれたマイクロモーターが一斉に振動しているのだ。肉悦にとろけた牝肉が沸騰しそうだ。かすかに赤く染まっていた蜜液はいつしか白く濁り、初めての体験でありながら深い快楽を証明していた。
膣内に侵入した数本の機械触手は奥にまで達すると子宮頸部に絡みついた。そこからわずかな口しか開いていない子宮口からさらに内部に侵入していく。
「あっ、はあああっ、ひぐっ……ああああっ」
ポルチオ性感とはまた違った、子宮内部から犯される感覚に金髪少女は悩乱する。だが、ドルクの悪魔のごとき機械触手はそれだけではないのだ。お尻の小さなすぼまりに、お小水の出口にまで侵入していく。
「いやっ、あっあふっ……くはあああっあっ、あおおおおっ」
小さな排泄口は少女らしい可憐なものだったが、すでにおびただしい粘液にまみれヌラヌラといやらしく光を反射していた。そこへ直径数ミリメートルのマイクロマニピュレータが吸い込まれるようにして這いこんでいく。
（だめっ。そんなところまでされたら……おかしくなっちゃうっ！）
いつの間にか膣内粘膜をこすりたてられ、子宮までも突き上げられる感覚が心の奥底から揺さぶるような激しい快感になってしまっていた。今はもう全身が性感帯になってしま

ったような敏感さなのだった。
「おっ、お尻はいやあっ、そこ、そこは違うのっ……あぐっううっ」
恥ずかしくも口惜しいことに苦痛がない。逆にアヌスの皺の一本ずつまでも丁寧にさぐり、なぞっていく触手が心地よくすらあるのが恐ろしかった。お尻の穴から全身を貫かれてしまったような、奇妙に甘い無力感がこみあげてくる。
ズリュッ、ズリュッ――！
「ああっ……そ、そんなところまで……っ、あっ、あああああっ」
まるで芋虫か、足すらない寄生虫が進むかのように触手が尿道をさかのぼっていく。尿動口を押し広げられた瞬間のかすかな痛みは、見る見るうちに異様な快感に変わっていく。せつなくも狂おしい排尿感にも似た感覚はもどかしい快感となって少女の快楽中枢をゆすりたてる。
「はあっ、はあっはあっ……」
ビクビクと全身が細かく痙攣していた。ジュクジュクと美肉は細かく痙攣しながら蜜を絞り出す。もう限界だった。今まで味わったことのない肉悦の沸騰が迫っていた。男がリズミカルに腰を使うその衝撃だけでも耐えがたいというのに、触手の刺激が異常なほどに深い快楽をもたらしていた。
「ははははっ。小娘どころか、子ブタちゃんだなあっ。サービスしてやるぜっ」

ドルクの嘲笑とともに、触手の動きが変わっていた。膣内と尿道、直腸を犯す触手の動きが同調し、波うちはじめたのだ。それは激しいピストンとタイミングを合わせながら、膣内の一点を刺激してくるのだ。

「ひいっっ――あううっ。だめっ、出ちゃうっ……そんなことしたらぁっ」

尿道内でうねる触手の感覚がたまらなかった。すでに高まった排尿感は一気に切羽詰まったものに変わる。いや、それが排尿感かどうかすらも判然としなかった。まるで巨大な壁が迫ってくるような絶望的な感覚が少女を捕らえていた。

（どうしよう……こんなの、こんなの耐えられない……ああっ）

膣内でウネウネと動く触手は波うちながら、ある一点でだけ特に大きな波を形作る。そこがGスポットだった。すでに高まりきった性感が、そこに一気に集中して巨大な波を作ろうとしていた。

「あをあああっ――ッ、お、おかひくっ、おかひくなっりゃう」

ろれつが回らなくなった少女が全身をうねらせながら泣く。ショートの金髪が乱れ、全身に玉のような汗を浮かべながら喘ぎ、鳴き、呻く。すでに目を開けることもできずに真っ赤な顔をして身悶えを繰り返すユリカはもう限界だ。山道を疲弊しきった登山者が登るがごとき頼りない状態だった。

きゅるきゅるっ！

「ああっ――っ……イッ、イクッ、おかしくなっちゃうううううっ！」

Gスポットを触手が突き上げた瞬間、少女は達していた。若くして軍に入り、宇宙海賊に身を投じた強さも才能もまったく関係なく、金髪娘は肉悦の絶頂を極めさせられていた。ビクビクと激しく女性器が収縮し、男のモノを食い締めながら大量の淫汁を噴出した。

脈動する快楽が全身を熱く燃え上がらせ、意識が消し飛びそうだった。自分の意思ではどうにもならない痙攣が、喘ぎがさらなる恥辱と快感を呼び寄せる無限ループと思われた瞬間、底意地の悪い麻薬組織幹部の次の小細工が発動した。

ぬちゅぬちゅっ――ちゅぷっ。

それは本当にかすかな音だった。だが、先ほどからさんざんいたぶられてきた尿道は突然触手を引き抜かれる衝撃に爆発的な快楽を脳髄に送り込み、少女の自制を決壊させた。

「あああっ、だめっ。漏れるっ！　漏れちゃうのおおっ――っ　ああ――っあああんっ」

チョロッ、チョロロロ――。

最初は控えめだった水流は見る見るうちに大量の放水と化した。全身の肌を焼く羞恥の熱が被虐の官能をさらに高めてしまう。キュンキュンと淫らに男のモノを食い締めるとその感覚が絶頂にある官能をさらに刺激し、肉悦の頂点から降りられなくなっていた。

（こんなに恥ずかしいとこ、見られちゃった……もう、ダメかも……）

そんな悲痛な思いも、今脳髄を沸騰させている快楽の前には無意味だった。

「ああーっ。すごいのっ。オシッコ、すごいのおっ――」
床を汚してしまっていることも、心の片隅でしかない。今はこの羞恥と被虐の快楽の中にどこまでも沈んでしまいたかった。ひたすらに貶められ、辱められながら快感の中に喘いでいたかったのだ。
はあっ、はあっ、はあっ……。
どれほどの間イキ続けていただろうか。かすかに理性が戻り、羞恥と屈辱が忌まわしいものとして息を吹きかえしてきていた。
「小娘は小娘らしく、感じて喘いでいればいいのさ」
そんなことはないと言いたかったのに、口からは快感に濁った恥ずかしい声しか出てこない。自分という人間が解体され、グズグズに溶けてしまったかのようだ。
「いいんだよ。ほら。お前の姉貴分だって、楽しんでいるんだから」
ぞくっ――。
あってはならないことだった。子供たちにとっては姉であり母親であり、時には教師でもあったキョーコ。誰よりも強く、優しかったキョーコが、男たちに囲まれて嬌声をあげていた。
「キョ、キョーコには……彼女には手を出さないって……」
「ああ、ひどいことはしていないぜ。気持ちいいことしかしてない」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/